

第三章 鬼哭こくの谷

1.

伊吹は座席に倒れ込んだ。膝の上に載せていた手提げバッグの中味が、ばらばらと床に飛び散る。肩を強く打って、伊吹は思わずうめき声を上げた。

——なんだ？ 何が起きた？

辺りを見回しても、静まりかえった夜の気配以外は何も感じられなかった。伊吹は二両目に乗っているため、一両目で運転手がどうしているかまでは分からない。ただとにかく、何か尋常でない事態が起きて、列車が止まったのは明らかだった。

鈍い衝撃が車体に走ったということは、人身事故だろうか。しかし、こんな場所です？ 暗くて辺りはほとんど見えないが、恐らく進路の左右は全て、山と森で覆われている。人家からもかなり距離があるはずだ。わざわざこんなところまでやって来て、列車にひかれる物好きがいるとも思えない。猿か鹿でも、山から下りてきたのだろうか。

そうして何とか起き上がると、伊吹は前の車両へ歩いて行って、窓越しに運転手へ声を掛けた。

「何かあったのか？」

そして、運転席の窓をコンコンと叩く。

中の運転手は、焦った表情で進行方向をしきりに確認しているようだった。どうやらぶつかった時の衝撃で車体正面のライトが壊れてしまったらしく、前方はほとんど見えない。車内照明の照り返しもあって、窓は真っ黒に塗りつぶされている。

しかし影の中、轆かれたその何かが、時折ごそごそと動いている様子はどうかがえた。

何なのかは、よく分からない。

「……すいません、何かを轆いてしまったようです。ちよつと確かめてきますんで、お客さん待っててください」

蒼い顔の運転手は伊吹にそう告げると、今のはなんや、とぶつぶつ呟き

ながら、懐中電灯を掴み、運転席脇のドアを開けて外へ出て行った。伊吹は一人、車内に残される。

伊吹は首を振ると、仕方なく踵を返して、元いた席へと戻っていった。

それにしても今日は、本当についていない、と伊吹は思った。朝から夕方まで他人に振り回されてるくでもないことばかりであったし、そして久々に一人で出かけるとこれだ。東京にいた頃はまだ、自分のやりたいことさえやっていけば問題なく時間が過ぎていったのに。いったん他人に巻き込まれだすと、望んでもいないことが起きる上、自分自身まで見失うのだ。だからこれからは、学校での付き合いも徐々になくしていった方が、

「があああああああああああああああああああああああああああ！」

その瞬間。

外から、運転手のそんな異常な叫び声が聞こえた。

伊吹が振り返ると、どん、と車体に何かが叩き付けられたような鈍い衝撃がまた走った。

そして次の瞬間、列車のフロントガラスが一瞬のうちに破碎して真っ白になったかと思うと、何か丸いボールのようなものが穴を開けてそれを突き破り、車内に飛び込んできた。そして、運転席と客席との間仕切りに勢いよくぶつかると、運転席の中に転がり落ちた。

間仕切りのガラスには、大量の血液と数本の髪の毛がこびり付いていた。

伊吹は少しの間その場に立ちつくし、その意味を考えていた。

「……あ……ああ」

そして、次第に身体の震えが止まらなくなった伊吹は、どうしたらよいのか分からず、とりあえずまた、元の座席に戻ろうとした。ひどく混乱し、今日の前で起きていることを信じたくなかった。けれど、赤黒い血の色合いは明らかに現実のものだった。

得体の知れない何かが、外にいる。そう考え出すと身体が上手く動かないくなる。それでも無理矢理歩こうとすると、腰が抜けて、その場に倒れ込んでしまった。伊吹は這いつくばいながら、二両目へと何とか進んでいく。

ここは向井坂とこくりのの間の、何もない山中を抜ける路線である。周囲の駅はどれも無人駅だし、人家もほとんどない。誰かが見つけて助けて

くれることは、あり得なかった。かといって、外に出て助けを呼ぶことも出来ない。外に何がいて何が起きているのか全く分からない状態であり、しかもどうやら、運転手はすでに息絶えている様子だった。

伊吹が這って二両目へのドアに手を掛けている間にも、どん、どんと大きな何かが車体にぶつかってくる音と振動が伝わってくる。しかも、どうやら外の何かは、一体だけではないようだった。右からも左からも音が聞こえ、時折いきいき、と耳にしたこともない奇怪な鳴き声のような音が聞こえた。その声が届く度、脚の震えがひどくなる。

唐突に、激しい振動と共に、車体全体が大きく軋んだ。

伊吹が天井を見上げると、何かが車輛の上をがさごそと歩き回る音が聞こえた。蜘蛛の蠢く音に似ている。気を失いそうになりながらも何とか二両目にたどり着いた伊吹はそこで、ようやく手提げの中の携帯電話のことを思い出した。

誰でもいい、あれで誰かに電話して、何とかしてもらわないといけない。

伊吹はそう思った。

——その時。

ぱん、という軽い破裂音が天井で鳴ったかと思うと、全ての電気が一斉に消えた。

車内は完全な暗闇になる。

そして、それとほぼ同時に、外の何かがぶつかってくる勢いが一気に苛烈になった。車体全体がみしみしと激しく揺れ、伊吹は床に転がる。次第に左右の窓ガラスが、音を立てて砕けた。伊吹は頭を両手で守り、うずくまるよりほかなかった。細かいガラス片が床に散らばり、伊吹の背中にもかかる。けれど、どうすることも出来ない。

やがて。

破れた窓ガラスから、何かが足を突き入れ、窓枠を歪め、中へ入り込んでくる。

きいきい、という鳴き声、しゅうしゅう、というよく分からない音が、そこかしこから聞こえる。真っ暗な中で何が起きているのか、伊吹には何も見えない。

ふいに——。

周囲が静かになった。

どうしたのだろうか、と伊吹はそつと顔を上げた。

ちようどその時、空に立ち籠める雲が僅かに隙を見せ、そこから月の光が、細く射し込んできた。車内に蒼い明かりが流れ込み、そして伊吹はやつと、その何かを見た。

何かの方も、三つの眼で伊吹を見据えていた。

伊吹は、喉が裂けるほどの叫び声を上げた。

2.

伊吹の叫びと合わせるように襲いかかってきたその何かは、毛だらけの足で伊吹を勢いよく殴りつけた。その一撃で、座席に強く身体をぶつけた伊吹は、ぐう、と声を漏らしてほとんど昏倒しそうになる。眼鏡にはひびが入り、腕やあばらが音を立てて数本折れたようだった。

おぼろになった視界で伊吹が前を見ていると、その何かはごそそと這ってこちらへ近づいてきて、そのまま伊吹の上に覆い被さってきた。もう伊吹は抵抗することも、叫ぶことも出来ない。ただ自分の身に起きることを、他人事のように眺めているばかりだった。

するとその何かは、頭部のこんもりとした毛中の一部分を、ぱっくりと開いた。そこがどうやら、奴の口のようなだった。口の中には、針のように異様に鋭く、しかも数え切れないほどの歯がびっしりと生えている。しゆうしゆう、という音がそこから聞こえ、ああ、これは口から漏れていた息の音だったのか、と伊吹はぼんやりと思った。

ゆっくりと、何かが伊吹に顔を近づけてくる。

そうして、その鋭い歯の生えた口で、伊吹の喉にかぶりついた。

伊吹の喉から、凄まじい勢いで血がほとばしる。

3.

——数分後。

何かの群は、ぼろぼろの人形のようになった伊吹を背に乗せて、深い山に戻っていった。

車両は横転させて、線路脇に放置したままだった。運転手の死体は、首だけ残して全て食い尽くしてしまった。頭部は硬くて食べにくいのだ。

何かの群は、がさごそと足音を鳴らしながら、まるで輿でも担ぐように伊吹を運ぶ。もちろん、周囲に見ている者は誰もいない。山を行き、川を越え、人の入り込むことのない森を、奥へ奥へと入っていく。伊吹はもう、虫の息だった。

何かの群は、とりあえず自らの住み処へ伊吹を持ち帰る様子だった。どのような意思によるのか、そもそも彼らに、意思と呼べるようなものがあるのかは分からない。

ただ何かたちは、元々ずいぶん昔からこの山に住み着いていたものだったし、山の領内を動く物があれば、それは自分たちの手に入れてよいと考えていた。だから、山道を軽装で歩いて笑って喋る人間を見つければ、片っ端から喰い殺していた。増えていた行方不明者も変死者も、全てこれが原因である。久方ぶりに印を解かれて世に現れた彼らとしては、人間は腹の足しにするにちょうどよい、隙だらけの生き物でしかなかった。

しかし――。

その中でも、伊吹は少しばかり特別のようだった。

社の印を解いた、尾津野の家の末裔。

どこまでそんなことを分かっているのかは知れないが、何かたちは肅々と伊吹を山へと運び去っていった。

やがて彼らは、彼らしか知らない山奥の谷へとたどり着いた。

その岩には青々と苔が生え、辺りには古い木々が力強く伸び、その枝からは、蔦が垂れている。広がる葉陰の所々に月光が射し込み、ここにしかない草花が、微かに色を添えていた。

ここは、陰の者たち、物の怪、鬼と呼ばれる彼らにしか立ち入ることの出来ない、静かな場所だった。彼らにとっては幸いにも、あまりに深い森の奥に過ぎて、彼らが封じられていた合間にも、人が訪れることはついぞ

なかった。彼らはがさごそと足音を立て、谷へと入り込む。

彼らは、伊吹を静かに草原くさほらの上に据えると、じつと彼女の姿を見た。伊吹はもはや、手の施しようのない状態に陥っていた。首からは血がだくどくと流れ出し続け、身体は傷だらけになり、腕はどちらも砕けていた。顔も青ざめ、生きていることが不思議なくらいであった。

そんな伊吹、かつての仇敵の、遙かな子孫である伊吹を彼らは取り囲み、何も言わずに、その意思の感じられない三つの眼で見据えていた。どんな感情をもって彼らがそんなことをしているのかは、誰にも分からないことであった。

しばらく時間が経ち、しまいに彼らは、口を大きく開いた。

針のような歯の触れ合うきしきしという音が、一斉に鳴る。彼らは一歩一歩、伊吹の下へと近づいていく。伊吹にはすでに、意識はなかった。

そうして、彼らは伊吹を喰い殺そうとした。その時だった。

谷の上から、大きな影が落ちた。

数頭いる彼らの全てを覆い隠すような、大きな大きな影だった。

彼らは、三つある眼を全て、その影の元へと向けた。

谷の上から覗き込んでいたのは、大きな大きな、異形の鬼であった。

4.

恐ろしく大きなその鬼は、人と同じ形をしていた。二本の腕を持ち、二本の足を持つている。しかし頭にはぴんと尖った大きな耳を持ち、口は耳元まで裂け、鼻も前方へ突き出している。そして何より、右に二つ、左に二つ、その顔には四つの大きな黒い目があった。

大鬼はその、どこか純真な子どものような眼で、毛むくじやらの何かたちを眺めていた。

何かたちも動きを止め、大鬼を黙って見つめている。

そのまま、大鬼は突然に、谷へ向かって真つ直ぐ飛び降りてきた。地面が轟々という音を立てて大きく揺れ、それと共に、伊吹は僅かに意識を取り戻した。土埃の舞う中、何かたちは無感情な眼差しのまま、大鬼の行方を凝視している。

大きな鬼は、不思議な文様の付いた貫頭衣を着ていた。首には木を削つて作つたらしい、首飾りを下げている。頭にはもじやもじやとした、長く黒い髪を生やしていた。その中からは、二本の大きく振れた角が突き出している。口の中には、鋭利な牙が何本も見えた。雲間から再び月明かりが射し込むと、大鬼のその一種美しく莊嚴な姿を照らし出す。誇り高い大鬼は、腰の帯に差した短刀を抜き、何かの群へと向き合った。

何かの群は伊吹からいったん離れ、大鬼の方へ向き直る。そして、次々に口を大きく開くと、針のようなびっしりとした歯を剥き出しにして、威嚇の音を出した。

大鬼は足を踏みきると、何かの群に飛びかかった。

大鬼は何かの一頭一頭につかみかかると、彼らのその毛だらけの足をもぎ取り、刀で斬りかかる。何かは太刀を受けると、苦悶の声を上げて暴れ回った。ちぎれた足の付け根から、滝のようにして緑色の血がどうどうと流れ落ちる。しかし負けじと、何かたちも大鬼を囲み、どこと構うことなく食らいついた。大鬼は二つの眉間に深い皺を刻み、不快そうに唸りを上げる。

と、大鬼はその力強い腕で、何かたちを振り払う。まるで小蜘蛛でも散らすように、何かたちははじき飛ばされ、谷の壁面にぶつかっては、ぐしや、というねとついた音と共に潰れていった。べったりとした血の跡が、そこに残る。

そうするうちに、大鬼の背後に回った何かの最後に残った一頭が、大きく身体をのけぞらせると、足先の爪を振りかざし、勢いよく大鬼に向かって突き刺した。大鬼の足に穴が空き、そこから止めどなく、赤い血が噴き出す。たちまち足下に、血溜まりが出来た。

だが――。

それでもさほどの痛みを覚えていないらしい大鬼は、怒りの声を上げ、握り拳を天に突き上げた。そして、何かへ向かって、まっすぐに振り下ろす。

ぐしゃばき、という骨の折れる音、身体の破裂する音と共に、最後の一文は、その場で潰えた。

5.

大鬼は、血で汚れた手を近くの苔になすり付けて拭くと、短刀を仕舞い、ゆっくりと伊吹の下へと近づいていった。

もうろうとした意識の伊吹は、自分の周囲で今何が起きているのかはまるで分かっていない。こうしている今も、彼女の首の傷口からは血が流れ落ちていた。自分の身体が、少しずつ冷たくなっているのを感じている。

今の伊吹は、死が近付いていると自覚することすら出来なかった。見えるのは、谷によって円形に区切られた空と、流れる雲、その向こうの月影、崖に伝う蔦ぐらいのもので、そのどれも朧おぼろだった。手も足も頭も動かないけれど、痛みも感じない。ただ、少しずつ時間の経つのが、ゆっくりになっている気がしていた。

大鬼は、そんな伊吹を覗き込む。そして、その四つの眼で彼女の顔を眺めていた。

大鬼にとって人と巡り会うのは、長い生の間で、まだ二度目だった。最初の一人は千年以上前、ここまで息も絶え絶えにやってきて、大鬼を山の麓へと連れ出した。大鬼はそこで暴れ、満足して山に帰った。鬼からしてみれば、それからどれほどの時間が経ったかなど、判然としないことであつた。

一瞬であつたようでもあるし、信じがたいほど長いときが過ぎたようでもある。その間、鬼はずっと、たった一人で山に暮らしていた。周囲にぞろぞろといたはずのこの世ならぬ者共は、いずれも社に封じられてしまっていたからだつた。ひどく退屈だったから、鬼は時折眠った。眠っている間に、何百年も過ぎてしまうこともあつた。そうして、今までずっと過ご

してきた。

今日の前にいる、死を目の当たりにした小さな者を、再び鬼はじっと見る。

その昔、見たことがある者に似ている気もした。かといって、憐憫の情が生まれるわけでもなく、ああ、これの命も地に還る、とだけ思った。

これが命を落とし、また別所に命が湧く。

そんな営みを、鬼は数えきれぬほど見てきたし、今度もまたその一つに過ぎなかった。長命の鬼にとって、他の生き物の生き死になど、草木が枯れまた生えるのと変わらぬ繰り返しでしかない。

倦くほどに、幾度も眺めてきた。

「ああ……」

ふいに、伊吹はそんな声を漏らした。

それとともに、目から涙をこぼした。

何故なのかは伊吹自身にすら分からなかったが、しかしその声は、赤ん坊の泣き声に似ていた。

鬼は、じっと伊吹を見つめている。

ふと、鬼は伊吹の身体に、顔を近づけた。

匂いを嗅ぐ。

血と女の匂いがした。

少し、顔を上げる。

伊吹と、正面から眼が合った。

鬼はこの時初めて、この世のものを美しいと感じた。

そして鬼は、口を開き、僅かに舌を出した。

伊吹の涙を舐める。

続けて、ぱっくりと開いた伊吹の喉の傷を眺める。

また舌で、その傷を、彼女の血を、身体を、鬼は舐めた。

幾度も優しく舐めた。

少し後——鬼の哭く声が、山中に弔した。

6.

伊吹は目を覚ました。

何が起きたのか分からず、辺りを見回す。そこは見たこともない山奥の、人跡すらない谷間のような場所だった。空は紫に染まり、そろそろ夜明けが迫る。携帯で時間を見ようと思ったけれど、持っていたはずの手提げ鞆はどこかへ行ってしまった。眼鏡が壊れて辺りが見づらい上に、頭がひどく痛み、何も考えることが出来ない。ゆっくりと腰を上げ、澄んだ空気を吸い込む。

その時。

伊吹は瞬間的に、昨日の夜からあったことを思いだした。

列車、衝突、運転手の首。

そして、訳の分からない化け物の群。

怯えた伊吹は、とっさに周囲を見廻した。けれど、動く物の姿は見あたらぬ。

そして自分の手足、身体を見た。あの時、あの化け物に襲われて、かなりの怪我を負ったはずだった。首も撫でてみる。

しかし——傷はどこにも見あたらぬ。

首は以前と変わらず綺麗なもので、手も足も痛みなく動かすことが出来る。頭痛はたぶん、変な姿勢のまま屋外で長時間寝たせいだろう。おかしなところといえば、服がボロボロになっていることぐらいだった。着ていたワンピースは袖が取れかけ、スカート部分も一部が裂けてなくなっている。

不審に思った伊吹はもう一度、辺りをきちんと見てみた。

すると——そう離れていないところに、化け物の巨大な死骸らしきものが転がっていた。

更によく見れば、崖の壁面に、まるで蚊のように潰された化け物がへばり付いていた。

到底、現実の光景とは思えなかった。

一体自分の身に何が起きたのか分からず、伊吹はしばらく、その場で茫然としていた。

「……………」

その時、突然そんな幼い声が背後から聞こえ、伊吹は飛び上がった。

何かまた化け物が現れたのではないかと思ひ、震えながら身構えて振り返る。どこに巨大な影が姿を見せるのか、必死になつて視線を送る。しかし、何も見あたらない。

そこで伊吹は、気がつく。

明け方の陽を浴びる草原の上に、一人の小さな男の子が倒れていた。

年頃にして五、六歳だろうか。少し癖のある黒髪を首筋まで伸ばし、目を瞑っている。整った、美しい顔立ちだった。彼は、妙な文様の付いた貫頭衣を身にまとっていた。左の二の腕には、なぜか刺青が描かれている。首からは首飾りを下げていて、腰には岩から削り出したような短刀を差していた。

そして、左手にはしっかりと、奇怪な形相の彫られた假面かめんを握りしめていた。

伊吹は恐る恐る、その子の側に近寄る。音を立てないようそつと腰を落とし、その顔を覗き込んだ。それと同時に、空を二羽ほどの鳥が飛び去る音が、谷に響いた。

男の子は、眼をぱっちり開いた。

伊吹と、真つ直ぐに眼が合った。